

常盤井とぎは

〔御香宮の南常盤町とぎは〕にあり。左馬頭義朝の妻室常盤御前とぎは此所に宿り汲しとぞ。然れども此人こゝに宿する事

唯一と夜なり。愚按、世に伏見ときはといふ双昏あり、後人これによつて名づくるもの歟

平治物語に曰　二月九日の夜に入て、三人のおさなき人を引ぐして清水寺せいすゐじへこそ参りけれ。母にもしらせじと思ひけ

れば、めの人わらはのひとりをも具せずして、八ツになる今若をばさきに立て、六歳の乙若をば手をひき、牛若うしわかは

二つになれば懐にいだきつゝ、たそがれ時に宿を出、足にまかせてたどり行心の中こそあはれなれ。(中略) 宇

多郡たごほりをこゝろざせば、大和大路をたづねつゝ、南をさしてあゆめども、ならはぬ旅の朝だちに、露とあらそふ我なみ

だ、袂もすそもしほれけり。如月十日の事なれば、余寒なほはげしく、あらしに氷る道芝の、こほりに足は破れ

つゝ、血にそむものすそもこゆへと、よその袖さへしほれけり。はうぐ伏見の叔母を尋ねたれどもいにしへ源氏の

大将の北の方など、いひし時、むすびも親みしが今は謀叛人の妻子となれば、うるさしとや思ひけん、物詣したり

とて情なかりしかども、若やしはしはと待居つゝ、まつ期も過ぎて立ぬれば、日も早頓て暮にけり。又立寄べき所

もなければ、あやしげなる柴の戸にイしに、内より女立出て情ありてぞ宿しけり。世に堪ぬ身の旅子とて、うきふ

ししげき竹ばしら、ある甲斐もなき命もて、ひとりなげきぞ菅菟の七■と思ふ人はなし。されども今宵も三■に

たゞ伏見ふしみの里に夜を明し、出れば頓て木幡山、馬はあらばや歩行にても君を思へば行ぞとよ。(下略)

〔一〕説に、常盤井は仙石谷伝光寺せんごくたにでんくわうといふ浄土宗の寺にあり、即ち此寺の縁起に見へたり。常盤は衰減なき所謂にして只

清泉の銘なり」

伏見陵

〔元材木町松林院の後にあり、後花園院の皇妃嘉楽門院信子の墓なり。内大臣藤原信定卿の女にして後土

御門院の御母なり。此寺は陵より後の建立にして、今浄土宗百万遍に属す〕

指月

〔江戸町より西の地名なり。此所伏見の勝地にして、前には宇治川の流れを帯て舟のゆき、あり、西南は巨掠

の江渺々として方一里の水面なり、月を愛するには無双の景色にて、いにしへより高貴の楼閣をいとなみ、清質の悠々たるを升、澄暉の藹々たるを降すの地なり〕

豊後橋

〔指月の西にあり。秀吉公の御時、向島に大友豊後守の第ありしより名とす。伏見院皇居の時は桂橋といふ、

指月の縁に本づくなり〕

向島

〔豊後橋の南爪の民家の地をいふ。右は巨掠堤にかゝりて大和街道なり、左は槇堤にして宇治に至る、双方の

堤秀吉公の御時設る所なり〕

中書島 ちゅうしよしま

〔豊後橋ぶんごの西にあり。文禄年中向島むかひしまに壘を築くといふは此中書島の地なり。慶長のはじめ伏見城と共に滅亡せり。それより年久しく荒廢の地となりしを、近年遊女町となりていにしへの江口神崎えぐちかんざきに準、旅客の船をとゞめ、楊柳の陰に觴をめぐらし、あるは歌舞の妓婦花のあしたに袖を翻へし、琴三弦の音は月のゆふべに絶間なし〕

辨財天社 べざいてん

〔中書島ちゅうしよしまにあり。真言宗にして、醍醐三寶院だいごさんぼうゐんに属し、長建寺ちやうけんじと号す。辨財天女べざいてんによは弘法大師こうぼうだいしの作。いにしへは修験道にして、宝永年中隣心和尚りうしん今の如く再建せり。毎歳六月廿五日には当社の祭祀とて、此島の賑ひいはん方なし〕

住吉社 すみよしのやしろ

〔川口船大工町かはぐちふなだいくにあり、宝蔵院ほうざうゐんと号す。社前に大木の古松あり、形蟠龍の如し〕

東本願寺御坊 ひがしほんぐわんじごぼう

〔御堂前町みだうまへにあり。慶長五年の草創にして、本尊は阿弥陀仏、聖徳太子しやうとくたいしの御作、立像長四尺ばかりなり。東本願寺ひがしほんぐわんじの輪番所なり。寺内に安藤次郎右衛門定次あんどうさだつぐが墓あり〕